

第43次南極観測・越冬隊から一報



企画本部 櫻庭俊昭

成田から南極へ向けて出発！

昨年の11月28日、観測隊員一行は成田からオーストラリアのパスに向けて出発。翌日、オーストラリア西海岸・フリーマントルで、砕氷艦「しらせ」に乗り込みました。直ちに生鮮食料の積み込み、観測器材の点検、艦上レセプションへの代表参加に加わる等、慌ただしい日課を過ごして、12月3日、穏やかな岸壁を離れ南下しました。

朝早くから夜遅く迄南極での活動の準備が続く中、出港2日目には荒れる海域に達し、早くも船酔いと食欲不振との戦いとなりました。南緯55度を通過すると、最大傾斜左舷37度、右舷32度と、50度を越える大きな揺れに遭遇し部屋の荷物が散乱して大騒ぎにもなりました。貴重な酒類を割ってがっかりし、互いに慰め合ったりしていました。その中で恒例の「しらせ」大学が開講され、第43次大学学長を拜命し、学術的交流と鋭気を養っておりました。

南進を続け、海水域に入ると共に揺れも穏やかになり、船酔いも解消されて来ます。それと時を同じくして物資の確認作業、甲板移動が活発

になってきます。いよいよ上陸の準備です。

2度目の昭和基地に立つ

現地時間平成13年12月20日15時30分「しらせ」艦発、同日16時07分昭和基地第1ヘリポート着。こうして2回目の南極の地に立ちました。

「しらせ」は同年12月23日、昭和基地沖の基地が見える海水上に錨を下ろしました。

越冬交代するまでは夏宿舎で「しらせ」支援隊との共同生活です。沢山の建設工事、輸送業務、観測の引継ぎをこの期間に行いました。この頃の昭和基地は、雪も大方消え、強風時には砂が舞い、平時は車が舞い上げる埃で、さながら山の中の建設現場を連想させる雰囲気です。

今年は海水が大きく後退し水の解けが早く海上輸送が危ぶまれていました。そのためかペンギンはあまり見かけませんでした。それでも時々アデリーペンギンが作業場に寄って来て心を癒してくれます。

太陽が沈まないこの期間は6時起床、7時20分から19時まで、真っ黒になって、野外での作業で、慣れないフォーククレーンやダンプカーを運転したり、時には荷台に乗って基地内を走り回って、夜遅くには、観測業務の引継ぎです。10日に一日休みと言うサイクルで動いています。

42次隊と越冬交代

2月1日が越冬交代式です。42次隊と43次隊がこの日を境にして業務を引き継ぎま

した。さらに、43次隊全員が夏宿舎を出て、基地の居住棟へ移りました。個室が割り当てられてややほっとした気分になります。徐々に夜が戻って11日には薄いオーロラを見ることが出来ました。

2月12日越冬隊が見送る中、残留支援をしていた42次隊の一部と43次夏隊を乗せた最終便のヘリコプターは頭上を大きく何回も旋回し基地を飛び立ちました。

荒れ狂う風

最終便の飛び立った翌日には最大瞬間風速45.7m/secを記録し早くも極地の厳しさを味わいました。14日にはとうとう越冬初の外出注意令が発令され人員点呼、野外での作業中止、直ちに避難、そして建物間の移動制限と、次々と指令が出され対応に追われていました。多くの隊員にとって初めての貴重な体験です。

2月23日には越冬開始後の初ブリザード、3月3日28時間、9日39時間におよぶブリザードで基地はあっとい間に白一色となり、南極の厳しい一面を見せ付けられました。

ブリザードをもたらす低気圧が来ると気温が上がります。4月8日は越冬開始後の最低気温マイナス29.3度(4月としては観測史上4番目)を記録しましたが、10日には一転しプラス0.5度を記録するなど、変わり易い天候の変化を実感させてくれました。

荒れる話ばかりを書きましたが、晴れた日の美しさは格別です。今回は「美に酔うひと時」をお送りします。

